

## 生活史への参入

### 母の語る生活史と子どもが綴る母

<高知> 中内逸郎

#### ◆綴り方を通しての出会い

五年生を担任した当初の家庭訪問で、こういち君の母親から、こういち君には不登校の傾向があることを聞かされた。三年生の時に本校に転校してきた彼は、以前いた学校での登校日数はほぼ半数であった。もともと持っていた喘息のための欠席もあったけれど、多くは精神的なものによる欠席だったと母親はとらえていた。

こういち君は、文章の書けない子ではなかった。しかし、いつも短くみょうにうまくまとめられた文章を綴る子だった。そのどれもが、一話完結の文章となっている。生活がそれぞれの場面で刹那的に切り離されているように感じられるものだった。

五年の三学期、もう学年も終わろうとしていた頃、こういち君は、『あんな』という題名の日記を書いてきた。これまでに繰り返してきた読み聞かせや、ほかの子の作品についての学習がきっかけだったのかもしれない。これまでにない題材だった。

その日記をもとに、共同推敲したのが『めい』というつづり方である。

めい

ぼくには、男の兄弟が六人いる。上から弘、茂、実、清、渉、力の六人で、ぼくは一番下の弟だ。

(中略)

アンナは、上から二番目の茂の子どもで、ぼくにとてもなついてくれていた女の子だ。とてもかわいかったけれど、お兄ちゃんが離婚してアンナは母親に引き取られた。離婚してからは、一回しか会っていない。

三年生の冬休みに、高松にカートに乗りに行った時のことだ。清の車に力と渉とぼくが乗り、茂の車には茂一人が乗って高松に行った。カート乗り場に着くと、ちょっとおくれて茂兄ちゃんが来た。茂兄ちゃんは車の窓を開けてから、

「アンナ連れて来るきよ。」

と言ってから、車で出かけた。ぼくは、アンナは高松に住んでいると分かった。茂が行ってからぼくたちは、カート場に入った。冬休みだったけれど、あまり混んでいなかった。一回三十分のカートに、一回乗ってから自動販売機の前でジュースを飲んでいると、入り口に茂の乗った自動車が入って来るのが見えた。

「あっ茂兄ちゃんや。」

と、ジュースを持ったまま力が言った。ぼくは少し残っているジュースをゴミ箱に捨てて、

車に走って行った。茂は、

「アンナ。おりや。」

と言って、助手席の方のドアを開けた。茂は笑っていた。アンナは一人で席からおりてから、茂と手をつないだ。アンナはピンクのスカートをはいていた。アンナには、ちょうど一年ぶりぐらいに会った。前に会ったときよりも大きくなっていて、四才ぐらいに見えた。ぼくたちのことを覚えていれば、ぼくか力の方に来ると思った。でも、茂と手をつないでいたので、覚えていないように見えた。アンナは茂の足にくっつきながら手をつないでいた。アンナは何も言わなかった。茂と手をつないだまま、ぼくたちの方を向いて、にこっと笑ってくれた。ぼくたちはみんなでカート場に入った。ジュースの自動販売機の前で、ぼくはアンナがぼくのことを覚えているか確かめようと思って、

「アンナ、ジュース飲む？」

と、アンナの方を向いて言った。アンナは何も言わずに茂の方を見た。だけど茂が、

「ジュースいる？」

と聞くと、

「いらん。」

と、茂の方を向いて言った。ぼくは覚えていないみたいやなと思った。この後も清が、

「カート乗ろう。」

と言っても、アンナは何も言わなかった。

(中略)

ぼくたちは、茂の車にアンナと一緒に乗った。ぼくは、後ろの右側の席にもたれていた。ちょっと助手席をのぞいて見ると、アンナは運転席と助手席の間に頭をおいてねていた。すぐにアンナの家に着いた。茂は車をおりて、助手席の方のドアをあけると、アンナをそっとだきあげた。茂はドアを閉める時に、

「じゃあ行って来るきよ。」

と言って、アンナをだいて歩いて行った。

二分ぐらいして、茂は走って車にもどってきた。ドアを閉めると茂はアクセルの方を見ながら、

「また来ようにゃあ。」

と、言ったけれど、声がふるえていた。

あれからずっとアンナには会っていない。アンナは今、小学一年生ぐらいだろう。ぼくは成長したアンナを見てみたい。離婚する前、茂はアンナとうまくいっていたようだ。でも、アンナの母親とはうまくいかなかったみたいだ。話では、茂も母親も、両方がアンナを引き取りたかったようだ。だけど茂は、アンナを自分で育てられないと分かって、母親にあずけたのだろう。

あれから、茂は何回か、

「高松に行くきよ。」

と、言って出かけた。仕事だと言っていたけれど、絶対にアンナに会っていると思う。茂は、

「離婚する。」

と、自分のお父さんとお母さんに言ってからも、元気がないという表情はぜんぜんなかった。だけど多分、その時からアンナに会いたかったと思う。

離婚は、本人たちにしか決められないことだから、しかたがないと分かっているけれど、ぼくはアンナのことが忘れられない。

この綴り方の元となる日記には、両親が離婚したアンナのことを「アンナはかわいそう」と、書かれていた。放課後の教室で遊びながら、その一文をのぞき込んだりゅういち君は、「こういち、俺はかわいそうな子か。俺は、かわいそうな子じゃないぞ」と、こういち君の顔を見た。

学年一の『わりことし』と誰もが認めるりゅういち君は、母と妹と三人で暮らしていた。

りゅういち君のこの一言は、推敲すべき焦点をはっきりさせた。「かわいそう」などということばで、簡単にまとめて終わらせてしまっただけとはいけないということである。もっと複雑に、もっと細やかに働かされている、こういち君や、兄弟たちのアンナに対する想いを、鮮明にさせなければいけないということである。これまでこういち君が書いてきた文章のように、一話完結に終わらないための推敲だった。

学級でこの作品を学習したいと思い、その了解を得るためにこういち君の家を訪ねた。

こういち君が、日記に書いてきた時からの経過を説明しながら、出来上がったつづり方を母親に見せると、

「子どもが寝てから、一人で読みます。たぶん平気では読めませんから」

と、つづり方をたたんだ。翌日また訪れることを約束して、帰ることにした。

こういち君の家を私が訪れるようになったのは、後悔からだった。一学期に数日こういち君が欠席した時だった。お母さんは、電話で「喘息です」と欠席の理由を伝えてくれたけれど、私は不登校ではないかと疑っていた。欠席の本当の理由を話してくれていないのではないかと疑っていたのだ。様子を聞くために電話した私の疑いを敏感に感じたお母さんは、喘息で呼吸の苦しいこういち君を電話口に出した。心配とは少し質のちがう私の疑いが、苦しいこういち君を電話口に出させたのだった。こういち君の家に行きだしたのはそれからだった。

翌日の夕方訪ねると、お母さんは「こんなにしっかり書いて、あの子はすごいねえ。どうぞ、学級で読んじゃってください。本当のことですからかまいません」と、学級で読むことを承諾して下さった。そしてこういち君が知らない、茂さんの離婚の経緯を詳しく語り始めた。若くして結婚した二人が、経済的にも、生活のあらゆる面でも両親やこういち君の家族をたよっていたこと。共働きの二人を支え、両親も、孝一君を含む家族も、アンナを自分の家族の一員としてかわいがってきたこと。そして、特にこういち君と力君の二人は、アンナをかわいがっていたことを話してくれた。

茂さんの話にとどまらず、母親は自分の生き立ちも話し始めた。こういち君の綴り方に触発されたのだろうか、一時間弱の話であったが、笑顔で話す姿に重みと生き抜いてきた自信を感じられた。その内容を、私は簡単に聞き流してはいけないと感じた。もう一度、時間をかけてしっかりと聞かせていただきたいと頼み、必ず時間をとることを約束して、帰ることにした。

帰りながら、お母さんの話を思い出した。その生き方に、改めて今の暮らしを生き抜いていく力強さを感じた。こういち君の家を訪れるといつも、玄関先の部屋に何人かの兄弟がくつろいでいる。決して広くはない家は、いつも整頓されている。その部屋にきちんと正座して、私と向かい合って話してくれるお母さんだった。夫の連れ子も全て、我が子として育てている母の力強さと、懐の深さを改めて確認しながらの帰り道だった。

## ◆親の歴史を再生する

すぐに時間をつくりたかったけれど、どうしてもかなわず、しばらくたってから話してくれるということになった。放課後の教室で、私とこういち君を前にして、お母さんはいつものように背筋をピンと伸ばして座った。「テープに録ってもかまいませんか」という私の申し出も、迷うことなく承諾してくれた。

いつもなら、仕出し屋の仕事に向かう前の仮眠の時間なのだろう。生活を支えるための貴重な時間をさいてくれたことに感謝しながら、カセットのスイッチを入れた。

夕日のオレンジ色が差し込む静かな教室で、お母さんは話し始めた。

### わたしの生き立ち

私には、身寄りというものがありません。一回り年の離れた兄があったけれども、もう亡くなりました。私の両親は早くに離婚しましたから、兄に嫁いできた姉が私の母親代わりのようなも

のでした。姉もたいへんだったと思います。でも、その姉にはあまりだいじにされたという記憶はありません。私も今になって、我が子を七人育てる中で、お姉さんの気持ちは分かるような気がします。

### 両親の離婚から

私は、両親が離婚した時のことは覚えていませんが、私が三才の時のことのようにです。最初は母が私を連れて再婚しました。檜原の山奥のことでした。猿が出るような山奥です。そこで小学校一年生になるまで新しい父と母とともに暮らしました。

その父が、母にも私にも、またその後のできた子どもにも暴力をふるう人でした。お酒を飲んで、私にもひどく暴力をふるいました。でも、私にはそこが私の家です。ですから我慢していたと思います。ですが、その父の暴力があまりひどいので、近所の人がある様子を見かねて、私の本当の父親に連絡をしたのです。

「あんまりひどいき、連れに来てやらんと可愛そうだ」  
ということでした。私はどんなことをされたのか、覚えていませんが、父親が帰ってくると怖くて、体がかたまったことは覚えています。

本当の父親が私を迎えに来ました。でも私は今自分が住んでいるところが自分の家だと思っているので、父のもとに行くのをいやだと言いました。その時のことは覚えています。それで今度は父に代わって、父と一緒に住んでいた兄が私を迎えに来ました。兄は、あれも買ってきてやるこれも買ってきてやる、私の機嫌をとりました。それで私は兄について父の家に帰ったのです。

### 兄の家での暮らし

父はたいへん温厚な人でしたので、なぜ離婚したのかが分かりません。理由を聞きたいと思いつつながら聞きづらく、何も聞けないままで父も亡くなりました。

兄に連れられて本山の家に行きましたが、私は兄夫婦と暮らし、父は私たちとは別に暮らしました。兄のお嫁さんは、なかなか勝ち気な人で、父とは一緒に暮らしたがりなからです。父は山の仕事をしながら養育費を出してくれていました。私は、中学三年まで兄夫婦と一緒に暮らすことになったのです。そのころは、家事はほとんど私がやっていました。洗濯と、掃除と、ご飯の用意をしました。そのころは、どの家でも子どもが仕事をしていましたから。ただ私には、兄の子どもの子守があつてたいへんでした。兄の二人の子どもは小さいときから、私が面倒を見てきました。学校には行かしてもらいましたが、早く帰って家の仕事をしなければなりません。学校から帰るとする仕事が決まっております、最初は掃除です。そして米をとぐのですが、小学生ですから上手にできないときがあります。すると姉に、

「やり直し」  
と言われました。米がうまくとげてなかったり、隅々まで掃除ができてないとか、雑巾のしぼり方が弱いなどと言われました。それまで私はやったことのないことですから、すぐにはできません。洗濯も手でやるのですから十分に落ちないこともありました。『やり直し』は、いつものことでした。

当時は、学校だけが楽しみでした。でもこんなことを話せる友だちはおりませんから、ただ友だちとわいわいするのが楽しみでした。

(中略)

小学校の三年生のころからは、二人の子どもの子守をしました。

私にはほかに行くところがありませんでしたから、ここだけが私の居場所だと思っていました。「おいてもらいゆうと思わんといかんよ」

と、姉によく言われました。姉には私は邪魔な存在だったと思います。

でも当時は、いじめられているようにしか思いませんでした。

## 家を離れて

中学を卒業すると、姉がどうしてもお手伝いさんにはいかなければいけないと言って、私を相互銀行の専務さんの家に、住み込みで働くようにやりました。一か月二千五百円で働きましたが、こんなことを続けてもいけないと思い、兄に頼んで兄の勤めていた会社でバスの車掌をすることになりました。バスガールということで、給料がとても良かったのです。寮に住みながら勤めていたこの頃が、一番楽しかった時期です。四、五年勤めましたが、二十才を過ぎた頃、兄が友だちの借金の保証人になっていたばかりに給料も差し押さえられる状態になりました。このままではやっていけないということで、大阪に行くことになりました。私も会社をやめて、一緒に連れて行かれたのですが、大阪の暮らしがいやですぐに高知に帰ってきました。

(中略)

今から五年前に主人は、腎臓の病気にかかりました。毎日透析を続けていれば寿命まで生きられますが、体がよわっていると思うようにならず、なかなかしんどいようです。私もずっと働ける限りは働いてきましたが、今はヤクルトのほかに夜は仕出し屋に行っています。いつまで続くかとは思いますが。

こんな話は誰にもはできません。それでも同じような生活をしてきた人は、話をするうちに、何か、においのようなものを感じます。感じた人には話せます。なぜかそういう人は少し話すと、においが分かるんです。

いろいろと話しましたが、やはり一部しか話せません。私には愚痴を言う身内がいませんでしたから、愚痴は言わずにやってきました。でも、もう私の体の中にはこれまでのことが一杯で、これ以上は入らんように思います。満杯です。

話し終わるとお母さんは、

「ほんの氷山の一角やねえ。なかなか全部は話せんもの」

と、付け加えた。私は、話を整理しきれないまま、幼い頃から成人するまでのお母さんの姿を頭に浮かべていた。兄の家を掃除する幼い少女。手で洗濯物をこする幼い姿。あるいは飲み屋の隅に座って兄を待っている姿が浮かんできた。あらゆる場面で、いつも『ここにしかおる場所はない』と自分に言い聞かせてきている。現実の自分の暮らしを嘆いたり、空想の世界へ逃避することのない、潔さと、力強さが伝わってきた。そして、話を聞きながら私の頭の中に描かれたそのたくましい少女は、これまでの歩みを経て、自信と優しさを感じさせる七人の子の母親になっている。

お母さんは、次第に家事の時間がせまってきたことが気になったのだろうか、話し終わると、余韻も残さずにすぐ席を立った。

私も、取り残されないようにと一緒に席を立った。

日が落ちて、教室も廊下も暗くなっていた。

翌日、話のテープお越しをしながら、幼いころから次第に成長していく彼女の姿が、更に鮮明になっていった。

## ◆母を綴る

母親の横にこしかけて、ずっとその話を聞いていたこういち君は、終始無言だった。話が終わってからも何も喋らずに私と別れたけれど、次のつづり方の時間には、母のことを綴った。それは、この時に聞いた母の生い立ちと、それ以前に聞いた話を重ねたものだった。次の時間に推敲し、「お母さん」という綴り方を仕上げた。

お母さん

(前略) テレビを見ていたお母さんが、

「私の会社の友だちらあ、自分の子どもにもバカやアホらあって言いよったで。」

と、悲しそうな声で言った。

ぼくは、これは親が自分の子どもを差別しゆうがやと思って、

「それで。」

と、お母さんの方を向いて聞いた。

(中略)

「その子、ナナちゃんっていう三年生の女の子ながやけど、親がいうには、じん臓が一つしかのおて、背が伸びん病気がやと。」

と、またおこって言った。ぼくは、

「薬とかうてんが。」

と、言った。

「その子、じん臓が一つしかないろう。やき、あんまり薬とかうてんが。」

お母さんは、ぼくの目を見て言った。

ぼくはこのことをくわしく聞いて日記に書こうと思った。ぼくは、漢字のノートを手帳の中に入れて、日記のノートを出した。お母さんはまたぼくの方を向いて、

「その病気が三才の時の検査で分かって、おぼちゃんも苦労したがやと。それで一年生のころから家庭教師をつけてねえ、けんど、つけたはええけど、その先生がナナちゃんに暴力をふるうたと。」

と、テレビを見ながら言った。

「その人、そのこと知っちゃったが？」

ぼくは、日記を書きながら聞いた。

「うん、その人も知っちゃったけんど、その先生しかおらんかったき、まかしちゃったがやと。」

お母さんはちょっと時計を見て言った。

ぼくはその親は自分の子どもがかわいくないがやろうかと思った。

「それでその先生には、あの子は頭が悪いと言われて、その人も自分の子どもに、『あんたのせいで今も苦労しゆうがでえ』と言うが。」

お母さんは、真剣な目でぼくを見ながら言った。

「それでお母さんはなんて言うた？」

と、ぼくは日記を書くのをやめて、お母さんの方に顔を向けた。お母さんは、

「私は、『もう、こりんざい子どもにそんなこと言われん。なんぼあんたが苦労しちよつても、子どもに言うたらいかん。そんなに子どもがかわいくないかね』と言うちゃった。その子はねえ、ヤクルトを手伝いに来た時に、『お母さんをよろしくお願ひします』って言うた子ながやき。」

と、座りながら言った。

ナナちゃんの体が悪いのは、本人のせいではない。なのに、この親はナナちゃんの病気のためにした苦労をナナちゃんのせいにしている。

ぼくはぜんそくがある。ぜんそくが起ると、三日間ぐらひは夜もほとんどねれない。ふとんに横になるとせきが出て、胸が苦しくなるのでかべにもたれて座っている。ぼくがぜんそくでせきをすると、お母さんが起きてくる。だけどそのことで悪く言われたことはない。

先生と一緒に、お母さんの生い立ちの話を聞いた。

(中略)

お母さんは仕事を始めてからは、自分の力だけで暮らしてきた。お兄さんが大阪に引っ越した時に、一緒に大阪に行くことになっていたけれど、

「高知がえい。」

と、お兄さんに言った。それからは一人で、だれにもたよらずに生活してきたことが分かった。だから、家族がたくさんほしくて、子どもをたくさん産んだらう。

お母さんは、こんな生い立ちがあるから親が子どもをばかにするのが許せなかったのだろう。

母親の力強さと、懐の深さを生い立ちの中から感じられる。こういち君は、人間が身に付けるべき力と、感性の深さを感じることができたのだろう。

こういち君はこの後も、兄と母を題材に選びいくつかの長い綴り方を書いた。その文章は、以前のようにへんにまとめられた、一話完結の文章ではなくなっていた。

どうしても忘れられないことを子どもが書き、その綴り方に励まされた親が自分の生い立ちを語った。そして、その語りに子どもが触発され、生活の一場で感じた母の姿勢をまた綴ったのである。

生活綴り方によって、親子がお互いの自分史を共有し合う営みではないだろうか。私は、綴り方教師として、その共有の場に参入していきたい。

